地球神話でみる島根半島・大船山（オオブネヤマ）の謎

ー　なぜ，水の神が生まれ坐（ザ）す山となったのか　ー

野村律夫（島根大学教育学部特任教授 / 島根半島・宍道湖中海ジオパーク専門員）

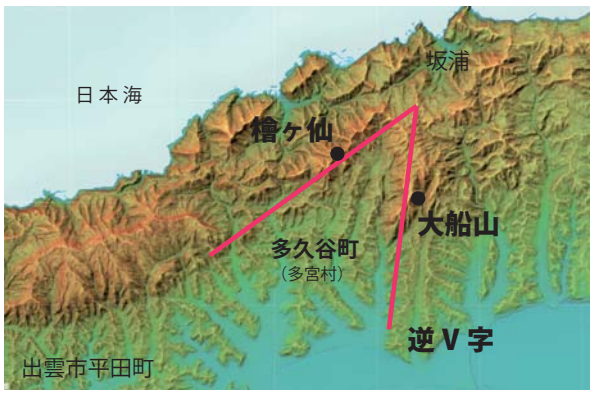
国引き神話の大地

2021.10.3-5

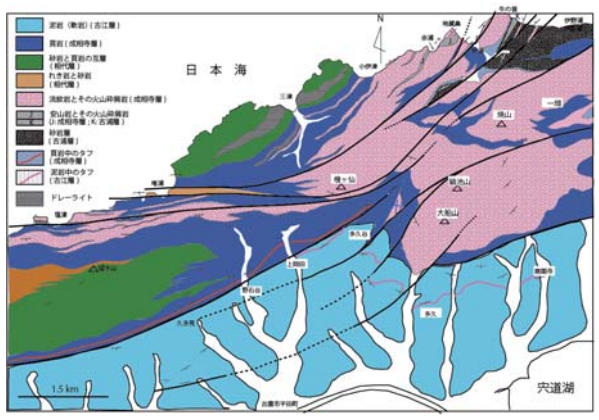
はじめに

出雲市平田町の北東部にある標高 327m の大船山は，風土記時代には神名樋山（カンナビヤマ）とよばれ，神の宿る山であった。出雲の 4 つのカンナビの山の一つであり，一般に，出雲世界を守ることを意図して設定されたと考えられている（島根県古代文化センター）。出雲国風土記・楯縫郡（タテヌヒノコホリ）には，この山に水の神が鎮座している伝承が語られている。古代研究者は，発掘調査によってこの山から祭祀のための土器を発見し，風土記の記述を検証している。この大船山（オオブネヤマ）について，地球神話学（別添ポスター参照）の観点に従って，この山に神が坐すと古代の人々が考えた背景について地質学的理由を考察した。

なお，出雲国風土記は出雲の地方誌。地勢・土質・植物・動物，地域の風俗・習慣・伝承・行政の実態を記録したもの。奈良時代，713 年に命を受け 733 年に朝廷に撰進（センシン）された。



地形の特徴。多久谷町は，逆 V 字の山で囲まれた低地形からなる。



地質図。大船山・檜ヶ仙の一帯は東西性の断層が屈曲する所。

平田町からみた大船山と檜ヶ仙

出雲国風土記の楯縫郡（たてぬひのこほり）の記述

神名樋山。郡家の東北六里一百六十歩の所にある。高さは一百二十丈五尺、周りは仁十一里一百八十歩である。嵬（ミネ）の西に石神がある。高さは一丈、周りは一丈。こみちの側に小さい石神が百余りある。古老が伝えて言うには、阿遅須枳高日子命（アジスキタカヒコノミコト）の后の天御梶日女命（アメノミカジヒメノミコト）が、多宮村（タクムラ）までいらっしゃって、多伎都比古命（タキツヒコナノミコト）をお産みになった。そのとき、お腹のこどもに教えておっしゃられたことには、「汝のお母様が御祖の向位*に生もうと思うが，ここがちょうどよい」とおっしゃられた。いわゆる石神は，これこそ多伎都比古命の御魂である。旱（ヒデリ）のときに雨乞いすると、必ず雨を降らせてくれる。（現代語訳は島根県古代文化センター偏：解説出雲国風土記による）　*向位とは向かいあった位置

【古代史研究による解説】

■　阿遅須枳高日子命（アジスキタカヒコノミコト）（父神）
　　天御梶日女命（アメノミカジヒメノミコト）（母神）
　　→　多伎都比古命（タキツヒコナノミコト）（子神）－（石神）

■多伎都比古命（タキツヒコナノミコト）は「雨乞いに祈ると雨を降らせる」　→　水を司る神で神名樋山の石神（滝の神ではない）

　→　神名樋山全体が水の神の坐す場所である。

■この山の岩塊や点在する滝の付近には，古墳時代前期～後期の土器が発見されており，風土記時代より 400 年近く前から祭祀の場所であった。

地球神話学としての観点はどこにあるのか（記述から読み取る地質学的意義）

●この山にある石神（＝多伎都比古命（タキツヒコナノミコト）の御魂）は何なのか？

●天御梶日女命（アメノミカジヒメノミコト）が，多伎都比古命をお産みになるのに，なぜこの場所なのか？

●なぜ，大船山が水を司る山となるのか？

●雨乞いをすると必ず雨を降らせてくれるとは？

大船山の伝説は，島根半島の形成史と密接に関係していた。

大船山付近の地形・地質学的特徴

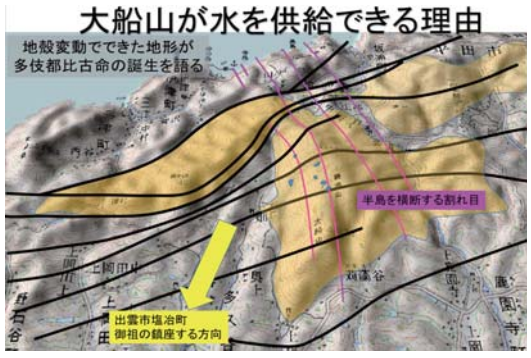
●大船山は，流紋岩溶岩と火砕岩よりなる。この場所を半島中央部西側として広域的に概観すると十六島湾から東西方向に延長する地質（砂岩泥岩互層・頁岩層・流紋岩質火砕岩層）と北東方向に延長する地質（流紋岩および同質火砕岩層）とが交わる部分に相当し，大船山・鍋池山（なべいけやま＝標高 358m）と檜ヶ仙（ひのきがせん＝標高 333m）が地形的な高まりをなす。すなわち，V 字の開いている方を南東に向けて回転させた構造となっている。逆 V 字のくさび部分に相当する地域（多久谷町）には泥質岩がしゅう曲や断層を伴って分布している。

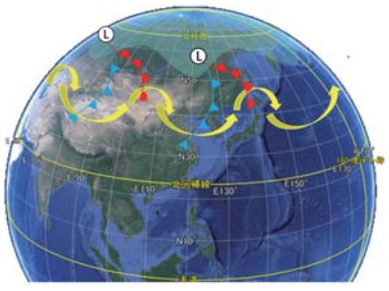
●南東 V 字地形は，東西性の宍道断層が坂浦付近で南東方向へ屈曲し，檜ヶ仙の南麓から大船山西側にかけて分散した複雑な構造地形による。このような，地質構造の形成は，中期中新世以降と考えられている。

●付近には大小の池がわき水として形成されている。大船山と鍋池山 (なべいけやま) （標高 358m）の間には，「のだば池」のような 4 つの池が数珠玉のように南北に連なる。島根半島で最も標高が高い場所にある。池が北に連なる延長部の海岸には，裂罅谷が形成されている。この谷を含めて，海岸には多くの南北方向の割れ目が形成されている。形成時期は不明であるが，西南日本内帯が東西方向の圧縮に置かれるようになった第四紀であろう。。

●島根半島には泥質岩の分布が広く，湧水が限られている。宍道湖南岸のような場所は耕作地としての価値はある。しかし，軟岩であるために帯水層としての機能がない。水田耕作には問題が多かった。そのため，古くからため池がつくられてきた歴史がある。

日本海側からみた地形





西から移動する前線

地形地質から読み解く神名樋山（大船山）伝説

●この山にある石神（＝多伎都比古命の御魂）は何なのか？

★古代史研究者によって石神は，現在，烏帽子岩と呼ばれている。この烏帽子岩は，烏帽子に似た（おにぎり型の）岩塊で，流紋岩の火砕岩よりなる。大船山山頂近くの西側斜面，急崖の端に位置している。岩塊そのものに地質学的意義はないが，烏帽子岩の形とその背景に広がる半島西部から出雲平野の空間が描く景観は，野本寛一氏の神聖地形といえる。

●天御梶日女命が，多伎都比古命をお産みになるのに，なぜこの場所なのか？

★大船山と檜ヶ仙の地形が示す逆 V 字型は，その開いている方向の延長が御祖の阿遅須枳高日子命の鎮座する出雲市塩冶町を遠望できる地形となっている。すなわち，この地形は島根半島の地質構造を特徴づける宍道断層としゅう曲運動によるものであった。

●なぜ，大船山が水を司る山となるのか？

★山頂近くの水は，南北方向にできた割れ目（節理）によって湧出し，池をつくることができた。湧水は，年間を通して滝を形成しながら平野へと流れ出し，干ばつ時にも水を供給できたため，大船山は，山一帯が不思議な存在になったと考えられる。その不思議さが神の宿る山へと伝説になったと考えても不思議でない。

●雨乞いをすると必ず雨を降らせてくれとは？

【推論】★雨乞いがどの場所で行われていたのかは明かではない。記録に残る最古の雨乞い（西暦 594 年）は，日本書記に「天皇が明日香村の川上にお出でになり，四方を拝し天を仰いで祈った」とある。ここで，以下のような推論をしてみたい。もし，雨乞いが石神（烏帽子岩）付近であったなら，西の空を仰ぐ場所になる。すなわち，偏西風による気象前線の西から東への移動を理解していた可能性はないだろうか。真偽のほどは今後の古代史研究に待ちたい。